ちいしゃの二本の大木（下青野）

下青野にある家の庭先に、幹の周りが三メートルほどもある大きな木が二本並んで立っている。お年寄りたちは、この大きな木の立っている家を「ちいしゃ」と呼んでいる。

なぜそう呼んでいるかというと、この木の皮や実などを原料にした薬を使って、お乳に関する病気を治療するお医者さんが住んでいて、乳医者がちいしゃとなったからだ。

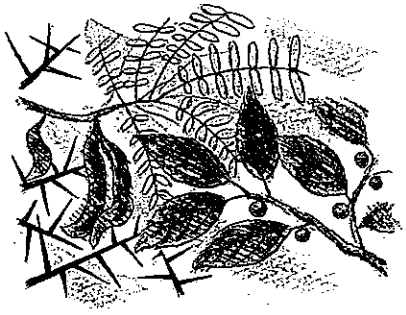
一本はニレの木で、家の人は「にれけやき」と呼んでいる。この木の皮が薬になる。もう一本の木はサイカチで、このあたりではあまり見られない珍しい木だ。

サイカチには以前雷が落ちて、根元に人が入れるくらいの大きな空洞ができている。

子どもたちは、この空洞でかくれんぼをしてよく遊んだものだ。夏の夕暮れには、ふくろうがよく飛んでくるので、「ふくろうの木」とも呼んでいた。枝や茎には細かなトゲがたくさんあり、秋に長いさやに入った実をつける。そのさやや種、木の皮が薬になる。

この二本の木から取った材料を細かく砕いて粉にしたり、煮詰めたりして薬を作る。しかし薬の調合は秘密で、このちいしゃだけしか知らないんだ。

この家に嫁に来たおばあさんが、まだ若いときのことだ。子どもにお乳をあげていてかまれてしまい、乳首に傷ができた。そんな時は、煮詰めた褐色の薬を布に伸ばして傷にはると、驚くほど早く傷が治ったということだ。また、煎じて飲むとお乳がよく出たという。



ちいしゃの薬は、良く効くと人から人へと伝わり、評判になった。その評判を聞いて、わざわざ遠くからも患者さんが、ちいしゃをたずねてきていた。

最近ではもう訪れる人もなくなったが、ちいしゃには今でも、当時使っていた薬ダンスがそのまま置いてある。また、原料を調合する割合などを書きつづった大切な書物が天井裏に残っているそうだ。